吉原十二時繪詞

ヲ 6
1493

吉原十二時絵詞

ヲ違6
1493

號 1498

明治四十一年
購求

吉原十二時繪詞

全

早稲田大學圖書館

吉原十二時繪詞

朝六ッ時

曉傘を買せけりと口ずさみ、土手の相傘ことにたび〳〵、いにしへはいざしら雲の立まとふ、中の町のきぬ〳〵に、みかへり柳のめを糸にて、いとねぶげなる小傾城このもかのもにこがくれて、客のかへるさをうかゞふ伏勢に、四ッ手駕籠のかけ聲を聞ては、鴈金のつらを乱せるかといぶかる、あるはあくる侘しき葛城の、髪の毛の

薄きまであらはに見ゆれば興をさまして帰るもあり
あるは左りづまのしどけなき姿を見て思ひをまして
戻るもあり老となく若きとなくかしこきもおろかな
るもゆふべに入てあしたにかへる是玄牝（げんぴん）の大門口な
るべし

五ツ時

ゆふべの口舌に折られたる櫛は枕のほとりに残りた
がひの心をしろかねの笄は翼莞莚（ひよくござ）のはしにたち鴨居
の飛鳥川かはりやすきは常ながらかはらぬ夜毎のつ
とめなり客をかへして白川夜舟櫺子（れんじ）にふりこむ白雪
はえりもとにひやつきやり手の聲は黄色なるが中に
ひゞきて寐間著に縫し芭蕉葉の夢のむなしく破るに
似たり

四ツ時

ゆあみするあそび女等が客のうはさのよしあしもな
にはの事もみな戀の湊なる色里のならひとて千人の
枕となる玉のかひなに一心命の文字をほるあれば萬
のなめものとなるくれなゐの唇に剃刀をふくめるあ

り、雪の肌蚕のあと、柳の腰のあけばなし、素顔は夏の富士額、つくろはぬ姿こそ見所おほけれ、かぶろの笄の花はさかりに、新造の鏡の月はくまなきをのみ見るものかは、

九ッ時

裏千衣のくれなゐなるは、天の羽衣に似て櫺子に懸り、紙細工のてる〳〵法師は、巫山の雨をにくみて軒のつまにつるさる、身仕舞部屋〳〵のきれ文は、破鏡ふたゝび紋日をてらさず、損料がりの笄は、落花かさねて頭に

のぼらず、晝の螢の見どころなく、ひろい世界せまき蚊帳に、たゝみ込たる文枕と、人見し夢のよしあしを、とふ人なきか、と籬におとづるゝは、いつものうらやさんなり、

八ッ時

もろこしに日に三たび眠る柳あり、名づけて眠柳といふ、人にたとへばあそび女等の身の上に似たり、ゆふべに源姓のあたらしきをむかへ、あしたに平族のふるきをおくりて、夜をルて晝とし、晝をルて夜とす、晝ルなほ

ねふらぬほどにくらせるは、知らずこゝろ誰をかうら、
む、

七ッ時

白き馬にめしたるとのごよとうたひしは、揚屋切手の
昔にして、おやぢがまへの竹櫺子とうたひしは、客草履
のふること也、細見記のものかはり、山形の下の星うつ
りて、古風はやゝうしなひつれど、今もなほかはらぬは
戀といふくせものなり、畫みせのすがゝきに、三味線の
糸のきれたるさへ氣にかゝり、いたづらに思はするに

くさは、つかへの種となりて、文のたよりもおぼつかな
し、おもふに、間夫は女郎の苦の種にて、やりては間夫の
案山子なるべし、

暮六ッ時

根岸の鶯は、醉翁が土手節を哢(さへづ)り、田中の蛙は、建出し(たてだし)の
朗細(らうさい)をうたひ、古風を殘す土手馬の、船か〳〵と呼ばふ、
たそがれに打はやす七艸は、砧(きぬた)の音かといぶかり、二
日の禮道中には、邯鄲(かんたん)の歩みをうつし、跡著の衣のぬひ
ものには、蜀國の錦を欺く隅田(すだ)の霞は横に引き、今戸の

煙は立にのぼる、吉書始の十字街、彼待合の辻占も、あふて嬉しの森あればつくろふ首尾の松もありけり、

五ッ時

謝安が驕りといへど、伽羅の下蹻(げた)はいたためしなく、鄧通が富といへど、小粒の大豆(まめ)まいたはなしを聞かず、さりや、高尾が名いよ〳〵高く、薄雲の情うすからず、玉菊の光りは灯籠に輝(かゞ)やき、小紫の色はゆかりの色里に深し、奥州がいつはりなしの提燈は、廓(さと)の意地を照らし、勝山がいもせ山の詠歌は、女郎の誠をしめす、たえぬ流れの戀の淵、一トたびはまりても、命の洗濯せざらめや、

四ッ時

それつら〳〵大門見るに、此里別世界なる事、男に女の操を守らせ、女はかへりてかさねづまをいとはず、女郎は上坐にあり、客は下座にあり、ものいふに手をつかず、物もらふて禮いはず、萬事の禮法は異なりといへども、吸付け烟草の雲となり、居續け日和の雨となる、夜着のうち蒲團の上、一生の歡會てんとたまるべからず

九ッ時

欠(あくび)とゝもに引ケ四ツの拍子木を聞ては、月老の憎をうけて、くれなゐの糸にむすばれぬ、小傾城ども俄に眠りさ醒して足音けはしく、楼上にのりて次の間につどふ、甘露梅と漬菜はもじ張の戸棚を出、帆立貝のにゆる音は、浅茅が原の松風といふ、かゝるあるは角箸のみじか夜をあかし、かねも水鶏も口かしましく、銚子の底をたゝきて笑ふあり、あるは浮寝の鳥の夜着かづきて、更行鐘の氷れるをうらみつゝ、しぐるゝ袖をしぼるもありけり、

八ッ時

遠寺の鐘の聲、いとほそく聞えて、更渡る夜の按摩はり、迷ひ子をよぶ鉦太鼓、ねぶたげなる三ツ下りに、わけは聞えぬむつごとの、いとしめやかなる閨のうち、床しくも上は草履のくつかたり〳〵と鳴、蛙はあすもやらすの雨をこふ、火の用心せよとよばふかな棒のおとは、名代新造の寝耳にひゞき、酒臭き硯蓋をねらひて盗する猫は、油盡たる行灯の朧月をやそふならん、

七ッ時

庭の焼火の白々とうたふ春の朝より、小傾城行てなぶらんと口ずさみぬる年の暮まで、川竹の流れはたえずして水臭かりしも、後には皆誠となる、いづくのたそや行灯の火かげにすれ違ふて、貸編笠の目にとまれるがえとりとなり、あかぬわかれの二挺立をうらみ、おもひを残して鬢をやく枕つれなし星あかり、まだ明はてぬ夜なれば、笠にかくれて頭巾に忍ばず、月は眉に似ていもが顔ばせを思ひ、蚊は道に二ツ三ツなきて、三味線の残聲いとほそく聞ゆ、いつこりずまにやみなんや、雨もよし原雲もよし原、

題昇平極樂國

厭離江戸の西方なりで北里に構へし一廓は、儚世界にも有難き、釋迦の知ざる極樂の東門如る大門口、夕に入て朝に皈る、交加しげき女肆に迷へば通も不通となり、悟れば不粋も水道尻まで、茗舗道を狭ンで軒を並べ、妓院天に聳て棟を連ね、遥に聞ゆる聲明の聲の長唄虚空に響き、四邊に散れる惣花降り、管絃歌舞の音楽も、包彈に調を止め、迦陵頻伽の妙聲も、歌妓の微音に羽をや窄めん、五街は五戒と通音でも、飲酒戒は破りながら、却て手

サケヲノマシムル者ハ五百生ガ間手ナキモノニ生ルト説カレシ

のある花穰あり方便を説ふ妄語戒ころし文句の殺生戒廓下薦と私夫あるは此處も許さぬ邪婬と偷盗二かいは共に禁らるれど持つ者なき地風にて佛陀も一切衆生と等く刹那も煩脳を息ずる則は菩提の心いかでか發らん若夫世尊来迎して浮れ廓の光景を見じ給ひ檀特ならぬ青樓に登り結跏趺座けた遊びをなさば三十にして成道正覺は欝悒く薪水の勞を忘れ遊輿修行の功力に因て真實を互に顯し二人涅槃の床の内合符合掌合躰し黄金ならぬ雪の肌つめたうざんすの一言には五尺の形躰も東天光と鳴く雞の音に明の鐘あかぬ別れや託らんかし

呉門　無物庵主覺阿彌陀佛悟一老衲撰述併書

鐘の音にふけゆくをうらみ鳥の聲にあくるをかこつはないで嬉しきよろなるべくきのふは何がしに比翼のかたらひをなしけふはくれがしに連理の契りはなせどわらひてくるしき晝もあるべし待と別るゝとに一日を過し泣くと笑ふとに一年を送り客のこゝろの器にしたがふ水のながれの身のうへをそれさつしておみなんし

法斎無物狂者戯題（花押）

是は白川の君越中守定信朝臣のおほせによりて繪を北尾政美（マサヨシ）蕙斎紹真が寫し詞を岩瀬醒（サムル）山東京傳が書る也ある人いへらく此巻物佐野の君攝津守正敦朝臣の御もとにて見侍りしがいとめでたういできにたりと聞しはみそとせばかりのむかしになんそれよりこのかたいかでその摸しをだに見まほしく年月もとむれどふつになくておもひやみにしを今年十一月（シモツキ）のはじめゆくりなくかの圖どりてふものを友だち何がしにかりえてうつしとゞめつされど我ひとりわたくしものにひめおかんもねぢけがましうおもへばおなじこゝろの人たちにも見せまほしくかつ師法斎無物翁の書ける戯文二章をもこれにちなみあればしりへにそへてかくおほやけざまになしたる也

文久元年十二月

ふみあき人活東子
しるす

3年11月